

2024年5月5日

説教題「一粒の麦」ヨハネによる福音書 12 章 20～33 節

主任牧師 加藤 誠

「はっきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。」(ヨハネ福音書12章24節)

主イエスが十字架に向かう覚悟をもってエルサレムに上られたのは過越の祭りの時であり、エルサレムの都は世界中からの巡礼者たちでごった返していました。その少し前に主イエスがベタニア村でラザロをよみがえらせた出来事は都中の評判となっていたので、群衆は「ナツメヤシの枝」を手にして主イエスを熱狂的に出迎えたのでした。なぜ「ナツメヤシの枝」だったのか。紀元前2世紀にユダヤの国が民族独立戦争に勝利した時に、凱旋した王と将軍たちを「ナツメヤシの枝」を振って出迎えたことに遡るようです。死人をよみがえらせる神的な力を持つイエスこそ、ローマ帝国の支配からユダヤ民族を救う「新しい王、新しい将軍」と人々は期待したのでした。

そのように英雄として熱狂的歓迎を受けた主イエスに一目会いたいと考えたギリシヤ人たち（たぶんユダヤ教に改宗した人びと）が弟子のフィリポに頼み、フィリポの言葉を聞いた主イエスが語られたのが、有名な「一粒の麦」の言葉でした。「よくよく言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである」（24節）。「だが、死ねば、多くの実を結ぶ。自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至る」（25節）。

つまり、「一粒の麦」には「一粒のままで終わる麦」と「多くの実りを結ぶ麦」と二種類あるのです。「自分のためだけに生きる麦」は一粒のままで終わるけれども、「神の御旨に従い、神から託された使命を生きる麦」は多くの実りを結ぶ。主イエスは、ご自分の願いではなく、どこまでも神の御旨を第一に求めて十字架に向かう「一粒の麦」として歩まれ、その主イエスを通して、世界中の人（ユダヤ人だけでなくギリシヤ人も）が神の愛と希望につながられる「豊かな実り」が起こされていきました。

ところで25節の「自分の命を憎む」とはどういう意味でしょうか。主イエスは私たちに「自分を正しく愛すること」「神が愛しているように自分を愛すること」を教えてくださいました方ではないでしょうか。神がどれだけ私たち一人ひとりを、貴く、かけがえのない存在として覚えてくださっているか。ヨハネ福音書には、主イエスを通して自分に注がれている「神の愛」を知らされ、喜びに立ち上がり、生き生きと歩み始めた人々の姿が紹介されています。サマリアの女も、ベトザタの池の男も、姦淫の現場で捕らえられたという女性も、目が見えずに生まれて人々から「罪にまみれた存在」と見なされていた男も、みんな、主イエスを通して、自分に注がれている「神の愛」を知らされて、喜びと安らぎに満ちた人生に導き入れられていきました。

その自分の命を「憎む」とはいったいどういうことなのでしょう。実は聖書独特の使われ方があり、「憎む」とは「選ばない」「後回しにする」という意味があります。例えばルカ 16 章に「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」という文脈の中で「一方を憎んで他方を愛するか、どちらかしか選べない」と語られています。私たちは「神も富も両方選びたい」のです。「両方うまくやりたい」のです。しかし主イエスは言われます。「神と富の両方は選べない。どちらかを主人として一方を選び、一方を憎む／後回しにしないとしない」と。つまり両方を選ぶ生き方は神の実りにつながらないのです。神の愛を選びとり、十字架を選びきった主イエスを通して、すべての人の罪を贖い、救いに導く神の豊かな実りがもたらされたように。

ここで主イエスは、十字架に向かうご自身の「一粒の麦」の歩みを示しつつ、私たちにも、あなたは「一粒の麦」としてどう生きるのか。「自分を愛する道」か、「神の愛を選び、神の御旨に従う道」か…と問いかけておられます。私たちは「一粒の麦」は主イエスのことであって、自分のように「小さく貧しい者」はとても「一粒の麦」にはなれないと思っているところがないでしょうか。けれども神は、この世の小さな者、貧しい者を通して豊かな働きをされる方なのであり、私たち一人ひとりを「神の豊かな実り」に招いておられる方なのです。

マタイ 25 章に「タラントンのたとえ」があります。先日、幼稚園のバイブルクラスを担当されている方が「もし 5 タラントン、2 タラントンの人が商売に失敗して財産を減らしたら、神さまはどうされたのでしょうか？」と保護者から質問されたと言われていました。皆さんは、どう思われますか。確かに商売はリスクがつきもので、元手を無くしてしまうリスクがある。だから 1 タラントンの人は神さまに叱られることを心配して土の中に埋めました。わたしは「タラントン＝愛する賜物」だと思っています。そして 5、2、1 のタラントンは、それぞれが置かれている状況、人間関係の「違い」だと理解します。そして大切なことは「愛する賜物」を私たちに託された神さまは「厳しく失敗を咎める神」ではなく「失敗をも用いてくださる愛の神」であるということです。「失敗してもいい。あなたが置かれた人間関係の中で、わたしが託した愛する賜物を用いなさい。人を愛することは傷ついたり、失ったり、リスクが伴うけれど、必ずそれは豊かな実を結ぶから！」と教えてくださったのです。

今朝、「一粒の麦」として私たちのためにご自身を後回しにして、神の御旨を選び取り、十字架に歩まれた主イエスの愛を覚えたいのです。そして、小さく、貧しい「一粒の麦」であったとしても、私たちを愛し、必ず豊かな実りに導いてくださる「愛の神」の御旨をまず第一に求めていきたいのです。たとえ、私たち人間の目に「失敗」に見えたとしても「神の豊かな実り」「永遠の命の希望」につなげてくださる主を信頼していきましょう。